

# 関東地方における貝塚史跡整備の同質化とその原因 —史跡価値の解釈、遺構表現とそのステークホルダー—

HOMOGENIZATION OF SHELL MOUND HISTORIC SITE  
MANAGEMENT IN THE KANTO REGION AND ITS CAUSES  
— HISTORIC SITE VALUE INTERPRETATION, ARCHAEOLOGICAL REMAINS  
PRESENTATION, AND THEIR STAKEHOLDERS —

劉 璐 (筑波大学)  
LIU LU (UNIVERSITY OF TSUKUBA)

貝塚史跡整備 / SHELL MOUND HISTORIC SITE MANAGEMENT  
同質化 / HOMOGENIZATION  
史跡価値 / VALUE OF HISTORIC SITE

## 1. 研究の背景と目的

2023年3月に開催された日本遺跡学会の20周年記念大会では、「遺跡保護の多様なあり方を求めて」というテーマのもと、「なぜ史跡のあり方は画一的になつたのか」を主要な議論の焦点とした。史跡整備の歴史において、この現象は学者たちによって何度も言及されている。1980年に前奈良国立文化財研究所所長の坪井清足氏は、各地域がそれぞれ独自の歴史経過を持つにもかかわらず、地域の特色をどのように表現するかという理念抜きで、寺や古墳など画一的なものしか構想できないという現象を指摘した<sup>1)</sup>。1990年に出版された『遺跡保存の事典』において、史跡公園の紹介の際、小笠原好彦氏は「近年、各地で史跡公園が増加するにしたがって、整備が類似したものがみられるようになり、個性を求める声も聞かれるようになつた」<sup>2)</sup>との懸念と期待を述べている。

この課題の要因について、十分な議論はなされていないものの、既に次に述べるようにいくつかの研究成果が積み上げられている。2014年、前川歩氏は整備された史跡の均質化と孤立化の問題を指摘し、均質化は「地域に固有であるはずの遺跡がどれも同じような遺跡整備手法でつくられ、似通ったものを見る」<sup>3)</sup>と定義し、2021年、文化人類学者のJohn Ertl氏は、日本全国の360カ所の遺跡において復元された1000棟を超える竪穴式住居を調査し、茅葺き屋根仕様の復元住

居が普及したプロセスの追跡によって、住居の復元における権威あるデザインの模倣行為を指摘した<sup>4)</sup>。また、2022年に刊行された「遺跡学研究」の座談会の議論では、建物の復元や再建を史跡整備事業採用の前提条件とすることが、整備の画一化の一因であると指摘された<sup>5)</sup>。「均質化」あるいは「画一化」は、地域の特色を表す遺跡が類似の方法で整備され、その結果、各遺跡の特色がわかりにくくなる現象を指す。そのため、本稿では「均質化」や「画一化」という表現をまとめて「同質化」と称した。

日本における遺跡保護の理念は、1919年の「史蹟名勝天然記念物保護法」によって展開してきた。「遺構主義」の保護理念の下では、遺跡全体の環境は考慮されず、「核心」とされる遺構のみが現状凍結保存の方針が取られていた<sup>6)</sup>。1963年から平城宮跡で試験的な史跡整備が始まり、遺構の平面表示、建物の復元と覆屋で発掘遺構の展示という三つの案を発展し、予算が少ないため一番経済的な「平城方式」とされる植栽や擬石を使う方法も実施し<sup>7)</sup>、これらの方法はその後、全国で普及してきた。

高度経済成長による開発での遺跡破壊の危機中、1960年代後半、遺跡の整備が文化庁の補助事業として始まった。この時期、史跡の保存と活用を図るために、遺跡の特徴を生かし、国民にわかりやすく親しめる史跡公園の整備にも着手した<sup>8)</sup>。1966年に始まった「風土記の丘」事業では、遺跡が集中的に所在する地域の

広域的な整備を進めた。1989年からの「ふるさと歴史の広場」事業では、往時の建物の実物大復元などの立体的整備や、遺構全体の模型やガイダンス施設の設置を行なった。遺跡の活用面では、1991年の「地域中核史跡等整備特別事業」は史跡を住民が地域史を学んだり、憩いの場所として活用できるよう、買い上げ及び整備を一体的に進めた<sup>9)</sup>。2015年の「歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業」は、来訪者目線で整備を行い、史跡等の価値の再発見・継続的な魅力発信につなげることにより、地域の活性化・アイデンティティの醸成を図り、地方創生に寄与している<sup>10)</sup>。

先人たちの努力により、多くの重要な遺跡が保存され、遺跡整備の理念も顕著に進化した。しかしながら、保存の方針が決まると、その遺跡をどのように生かし、その価値をどう伝えるかという課題は、過去から現在にかけて、直面してきた厳しい挑戦である。「目立つ上部構造物を持たないタイプの遺跡の保存整備」<sup>11)</sup>という日本の遺跡整備の特徴は、地表で何らかの表示をしなければ、一般の人でなくとも理解できない。この視点から考えると、地表に隆起が見られる古墳や礎石が残る官衙遺跡とは異なり、長らく地下に埋もれている貝塚遺跡の整備における問題は特に顕著であると言える。

1982年、「貝塚のまち」と呼ばれる千葉市は、各分野の専門家や関係者に依頼し、千葉市史跡整備計画策定委員会を設置し、縄文貝塚の具体的な整備方法の協議を行った。小林達雄氏は、史跡整備の目的に基づいて、そのアプローチを3つのパターンに分類している。それぞれ、「史跡が保有する情報および遺跡をとりまく自然の保存を主目的とする整備」、「史跡の内容表現を主目的とする整備」と「史跡の多角的な活用を主目的とする整備」である<sup>12)</sup>。

この分類に加え、岡田茂弘氏はさらに具体的な史跡整備の方法に基づいて4つのパターンを提出している。これらは「記念碑的整備」、「現状保存的整備」、「野外博物館的整備」、「多角的活用的整備」である。千葉市に位置する国指定の貝塚史跡の中で、犢橋貝塚と花輪貝塚では「現状保存的整備」が行われた一方、加曽利貝塚遺跡では当時としては稀な遺跡博物館としての画

期的な展望が築かれた。その中で、「貝層断面」・「住居跡群」の2つの観覧施設は、「野外博物館」の中核となり、歴史の研究と学習の場として機能している<sup>13)</sup>。2022年、埼玉県内の国史跡の貝塚である神明貝塚、水子貝塚、黒浜貝塚、真福寺貝塚の担当者によって「国史跡の貝塚の保存と活用の将来像」をテーマにシンポジウムが開催された。この中で、水子貝塚の担当者は「水子貝塚の史跡整備の方法は、一番オーソドックスな方法で、復元住居をやったり、貝塚の表示、縄文の森、そういう物を復元と言うことで、当時としてはそれが当り前の整備の手法だったわけだ」<sup>14)</sup>と評価した。1991年から着手され、3年間で整備が完成した「縄文ふれあい広場 水子貝塚公園」は、「野外博物館的整備」のパターンを採用したもので、当時最も注目される整備方法であった。しかし、ここで「一番オーソドックスな方法」や「当り前の整備の手法」の考え方方が、史跡整備の同質化の影響を受けて形成され、同時にその傾向をさらに強めていると考えている。

貝塚遺跡は、「時空カプセル」のようなアルカリ性環境で、日本の酸性土壌にもかかわらず、人骨や動物の骨格、土器などの遺物が豊富に残っており、考古学研究において重要な位置を占めている。整備実践の例が多い一方で、同質化の傾向も比較的明らかとなっている。類似した貝層展示や平面または立体表示の下では、各貝塚の特色が曖昧になり、異なる遺跡の価値が混同されることがある。

2018年の文化財保護法改正により、日本の文化財行政は「保存から活用へ」という方向性の転換を遂げ、観光や地域活性化の施策を積極的に推進していた。史跡の価値に対する認識は時代と共に変遷し、現在は史跡の活用が重要視されており、地域との結びつきや観光資源としての側面も期待されている。それに伴い、ステークホルダーと史跡との関わりが再度問われることとなった。既に同質化された遺跡をこれからどのように地域が扱うか、どのように再整備するかの課題が差し迫っている。したがって、本研究は史跡の価値解釈、遺構表現とステークホルダーの視点から、現在の史跡整備の同質化の問題がどのように生じているのか検証した。

表1 関東地方各県(都)の国指定史跡の貝塚遺跡

都道府県	国指定史跡・貝塚遺跡名称
茨城県	大串貝塚、陸平貝塚、上高津貝塚、広畠貝塚
千葉県	加曾利貝塚、月ノ木貝塚、荒屋敷貝塚、犢橋貝塚、花輪貝塚、堀之内貝塚、姥山貝塚、曾谷貝塚、山崎貝塚、良文貝塚、阿玉台貝塚、山野貝塚、取掛西貝塚
埼玉県	水子貝塚、黒浜貝塚、真福寺貝塚、神明貝塚
東京都	大森貝塚、中里貝塚
神奈川県	五領ヶ台貝塚、夏島貝塚

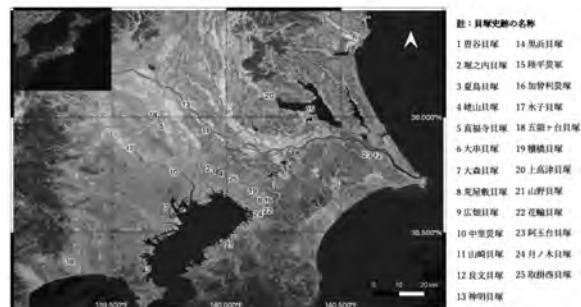


図1 関東地方25件国指定史跡貝塚の位置（筆者によってQGISを用いて編集）

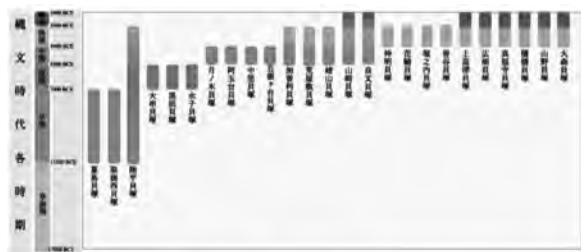


図2 関東地方25件国指定史跡貝塚の時期（筆者作成）

本研究は、関東地方25カ所の国指定史跡である貝塚遺跡の整備成果を研究対象とした。これらの貝塚遺跡は茨城県、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県に位置しており（表1・図1）、時代的には縄文時代早期から晩期にかけてのものである（図2）。本研究の目的は、貝塚遺跡の価値解釈、遺構表現、ステークホルダーの分析を通じて、国指定史跡の貝塚遺跡整備における同質化現象の形成原因を実証研究に基づいて解明することであり、その結果を通して、同質化問題の解決へ向けた新しい思考の方向性を提供することである。

## 2. 貝塚遺跡に対する価値解釈の不足

### （1）歴史的原因

日本における文化財思想は、明治4年（1871）の古

器物保存法、明治30年（1897）の古社寺保存法、昭和4年（1929）の国宝保存法、昭和8年（1933）の重要な美術品の保存に関する法律によって展開してきた。その中心は、典籍、美術品など屋内に秘蔵され伝世される細美な遺品にあり、屋外のものも社寺の建築を主とするものであった。

これらの文化財は富裕層や文人墨客によって珍重され、また知識人や愛好者によって鑑賞の対象とされ、美学や技術的な側面から価値が付与された。このような古い文化財思想の影響の下、1919年の「史蹟名勝天然記念物保護法」においては、美的、顕彰的な要素が強かった。史跡の内容は主に供養塔、礎石など、広い空間を占有しない部分的かつ細美なもので、叙情的、鑑賞的な視点から提供され、遺跡全体の保存やその歴史的真実の再現を無視した<sup>15)</sup>。このような「遺構主義」の保存概念の下、遺跡の中でいわゆる「核」の遺構だけが残り、周囲の環境との関連を失い、遺構単体の同質性の問題が直接現れた。

また、明治時代以降の学問視点において、日本の考古学は皇国史觀の固い枠組みの中で発展していた。皇國の顕彰のために古墳の研究が許されたとしても、一般庶民の生活の場である集落を関連付け、それに上代文化と上代人の生活の実相を把握しようとする研究は有り得なかった。また、いわゆる「実証主義」の考古学視点における、関東地区の貝塚の発掘の目的は、縄文時代人の生活を調べるためではなく、どのような型式の土器がどのような層位的順序で埋まっているかを調査することで<sup>16)</sup>、貝塚に秘められた文化内容や文化構造は長い間無視されていた。考古学的資料を元に過去を再構築しようとする試みにおいて、古代の人々の生業や生産、自然環境といった多岐にわたる側面は、今なお未解明な点が多い。遺跡と出土物の形態の理解は当然重要であるが、形態だけを理解するのではなく、遺存の価値と意義を理解しなければ、文化の核心を捉えるのは極めて困難である。

2013年のバラ憲章（The Burra Charter）は、「文化的意義」を過去、現在、または未来の世代に対する美学的、歴史的、科学的、社会的、または精神的な価値と定義し、文化遺産の保存対策において、その場所

の価値全てを認識し、考慮するアプローチを強調している<sup>17)</sup>。遺跡は現代人の文化的基因が眠り、往時の記憶を呼び起こす場所で、出土した遺物はかつて人々が日常で使用したもので、現代人とは疎遠ではなく、むしろ親しみやすいものである。遺跡の価値に対する充分な解釈は、現代人が過去の時代をより深く理解する助けとなり、訪問者に過去の生活を想像させ、古今のつながりを感じさせることができる。

## (2) 総合解説板の価値解釈不足

日本においては、史跡の本質的価値とは、史跡に指定された土地に存在する「遺跡」が土地と一体となって有する日本の歴史上又は学術上の価値である（文化財保護法第2条）。史跡整備の前提として、史跡の価値を明確に把握し、それらの保存と管理のための基本方針を定めることが必要である<sup>18)</sup>。史跡を整備する際に、訪問者が史跡を理解しやすくするため、総合解説板が通常史跡の所在地に設置され、文字と画像で史跡の内容を紹介する。

史跡指定段階で設置される史跡名称、指定年月日、および指定理由を記述する説明板とは異なり、整備段階の総合解説板は社会・一般市民へ学術研究成果を還元する役割を果たし、史跡の魅力を分かりやすい言葉で伝えることが期待される。総合解説板の内容は遺跡の価値を集約して表現しており、訪問者の遺跡に対する認識に大いに関係している。この文字と画像の内容を分析することで、各時期の整備における遺跡の価値解釈の視点、及びその方法の特徴を把握することが可能である。

現時点では、文化財行政により整備が完了した貝塚遺



図3 曾谷貝塚解説板（筆者撮影）



図4 2021年更新した堀之内貝塚解説板

跡は8カ所（加曾利貝塚、姥山貝塚、山崎貝塚、堀之内貝塚、曾谷貝塚、水子貝塚、上高津貝塚、黒浜貝塚）に及ぶ。今までどのように貝塚遺跡の価値が認識されているかを明確にするために、上記の8つの貝塚遺跡の総合解説板上の文字と画像の内容を整理・統計した。具体的な分析手法としては、テキストの各文と画像の各1枚を単位に、提供される情報のカテゴリをまとめて（表2）、それらの情報を統計化し比較し（表3）、総合解説板が提供する情報の特徴を分析して属性において情報のカテゴリを示す「位置」などの言葉を入れた。特に史跡価値を解説するテキスト部分を重点的に検討した。

表2を作成するにあたり、昭和57年2月に設定された「姥山貝塚」の総合解説板を具体例として取り上げる。姥山貝塚の解説文では、冒頭の一文に「下総台地の西端、大柏川の流れる大柏谷から、東方に向かって入りこむ樹枝状谷のひとつ、向根支谷の北側に位置し標高23~25mを測ります」とあるが、これは遺跡の位置を示しているため、位置と分類し、文の先頭に（位置）を追記した。次の文「この貝塚は、中央部が窪み、南を除く周囲が土手状に高まった地形をしています」は、貝塚の地形を述べているため、（地形）と追記した。また、「貝層はこの土手状の高まりにあり、C字形をしているので、馬蹄形貝塚と呼ばれています」は貝塚の形状について述べているため、（形状）を注釈した。この方法で、（規模）および（出土物）も順次追記する。次に、「この貝塚の調査は、明治26年1月の八木斐三郎氏による発掘が、最初の記録として残さ

表2 関東地方における整備済み貝塚史跡8基の総合解説板内容の分析結果

史跡名称	貝塚史跡の総合解説板の内容を分析した結果		
設置時期	文字	図	
1982 姥山貝塚	<p>国指定史跡 姥山貝塚 暦和42年8月17日指定 公有面積 22,772.81 m<sup>2</sup></p> <p>指定理由</p> <p>1. 基準：特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準、史跡の部第一項貝塚による。</p> <p>2. 説明：(位置)姥山貝塚は、下総台地の西端、大柏川の流れる大柏谷から、東方に向かって入りこむ樹枝状谷のひとつ、向根支谷の北側に位置し標高 23~25m を測ります。(地形)この貝塚は、中央部が窪み、南を除く周囲が土手状に高まつた地形をしています。(形状)貝層はこの土手状の高まりにあり、C字形をしているので、馬蹄形貝塚と呼ばれています。(規模)貝層の規模は、外径が東西 130 メートル、南北 120 メートルを測ります。(出土物)貝の種類としては、ハマグリが主体で他にアザリ、サルボウ、シオフキ、ハイガイ、マガキなど 30 種類以上もの貝が発掘されました。(研究活動)この貝塚の調査は、明治26年1月の八木斐三郎氏による発掘が、最初の記録として残され、以降昭和37年5月まで数多くの調査が行われました。(出土物)この結果、縄文時代中期に主に属する竪穴住居が39軒、人骨は143体も発見されました。特にこの貝塚が注目されることは、日本で初めて、縄文時代の家と炉と柱をもつ竪穴住居であることが、確実にわかったことです。また。(価値と意義)1軒の竪穴住居の床に、5体の人の骨が発見され、人骨構成や家族の問題を考えるうえで、重要な資料となりました。なお、人骨が143体も出てきたのは、日本で第3番目に多く、縄文人の形質を研究する上で非常に貴重しました。(保護政策)この結果、国の史跡に指定され、全域を公有化しました。</p> <p>昭和57年2月 市川市教育委員会</p>	<p>①(地形・範囲・研究活動) 姥山貝塚の地形と貝の分布、発掘地点(現在地)</p> <p>②(範囲・形状) 大正15年撮影の姥山貝塚航空写真</p>	
1989 曾谷貝塚	<p>史跡 曾谷貝塚 指定 昭和五十四年十二月二十二日 指定面積 四二、一四一・六四m<sup>2</sup> 所在地 市川市曾谷二丁目</p> <p>(時代)ここは、今から三~四千年前くらい前の縄文時代も終わりに近いころ、私たちの祖先である縄文人が、住居をつくり生活していた遺跡です。(貝塚の定義)あたりには、貝の殻がたくさん散っていますが、ここで生活した縄文人が海辺で貝をとり、ここまで運んで身を食べ、貝殻を捨てたことによるものです。このような貝殻の散っている遺跡を、特に貝塚とよんでほかの遺跡と区別しています。(位置)貝塚は、標高約20~25m の下総台地に立地しています。(地形)それも平らなどころではなく、窪みの周りが北を除いて上手状に高くなっているという。少し起伏のある微地形を運んでいます。貝塚は、このU字形の土手状の高まりに乗るように分布しています。(規模)この辺地を巡る高まりの地形が大きいことを反映して、貝層分布の範囲は、外径が南北約240m、東西約210m、内径が南北約210m、東西約60~80m と、日本有数の規模をもっています。(形状)このような、C字やU字形に貝層が分布している貝塚は、「馬蹄形貝塚」とよばれています。(縄文時代の生活)この土手状の高まりは、周辺ではここだけにあるものですが、水はけの良い場所であったらしく、縄文人はここに竪穴住居をつくって住んでいました。そして住まいの周りには、食べかすとしての貝殻や骨、あるいは壊れた土器や石器などの道具を捨て、死んだ仲間を埋葬するなど、彼らの集落生活を物語る痕跡が多くみられます。(出土物)これまでに、四〇軒をこえる竪穴住居の跡、二〇軒をこえる埋葬人骨が発見されています。しかし、未発掘の面積の方が調査が済んだ面積よりもはるかに多く、まだたくさんある住居跡や人骨が、曾谷の縄文人の使った道具などといっしょに埋もれています。(研究活動)曾谷貝塚の名を学界で有名なものとしたのは、昭和十二年の山内毒男氏による「曾谷式土器」の提唱によるものです。(価値と意義)この例数の少ない「曾谷式土器」を発見しようというが、その後の曾谷貝塚調査の重要なテーマでした。(自然環境とその利用)今から三~四千年前、このあたりは、コナラを中心にクリなど冬に葉が落ちる落葉広葉樹林でおわれ、シイ・カシなどの照葉樹が次第に増えてきたことが想像されます。(研究成果)クリ、トチノミ、いろいろなドングリの実が、大量に採集され、保存食にもなったと考えられます。そこは、イヌシヤニホンシカなどのいる山野でもあります。弓矢などでとっていました。貝や魚は、すべて海のもので、おそらく2km 以上離れている曾谷付近まで出かけ、海辺の干潟でハマグリなどの貝をとり、また海に出でてスズキやクロダイなどの魚をとっていましたことでしょう。豊かな自然の恵みが、この曾谷の縄文ムラの生活を豊かなものとしていたのです。(保護行政)この曾谷貝塚は、後世の人びとにも伝え、残していくため、「国史跡」として指定され、保護されているのです。</p> <p>平成元年3月 市川市教育委員会</p>	<p>①(範囲・形状) 貝塚分布の範囲</p> <p>②(出土物) 発見された竪穴式住居(E地点)</p>	
1994 水子貝塚	<p>国指定史跡 水子貝塚 指定面積 39,347 m<sup>2</sup></p> <p>(位置と地形)富士見市は、日本最大の平野である関東平野の一角にあります。関東平野は富士山などの火山灰が堆積してできた関東ローム層の台地と、利根川や荒川などの大きな川が流れる低地からなります。富士見市は、西半分が武藏野台地、東半分が荒川低地上の上に広がっています。この低地上に、縄文時代は海が広がっていました。(貝塚の形成)海の幸を求めて集った人々は台地の上に多くの貝塚を残しました。(規模)その中でも最も大規模なものが水子貝塚です。水子貝塚は、(研究活動)昭和12年(1937)に発見され、昭和13年(1938)・14年(1939)・42年(1967)の3回の調査によって(時代)縄文時代前期中頃(約5500年前)の(形状)小貝塚が多数環状に分布していることや、(研究活動)小貝塚は竪穴住居の跡に貝殻が捨てられたものであることが明らかになりました。(価値と意義)これらの成果から、昭和44年(1969)に「縄文時代前期の多くの小貝塚からなる大規模な貝塚群のひとつであるとともに、小貝塚の分布から貝塚形成当時の集落の規模形態を推測しうる遺跡として学術上価値が高く、(保護行政)また遺跡の遺存状況も良好であるとして、国史跡に指定されました。昭和45年(1970)から、23年の年月をかけ指定地の公有化を進めました。平成3年(1991)には、史跡等活用特別事業(「ふるさと歴史の広場」事業)に採択され、県と埼玉県の補助金の交付を受け整備事業を開始しました。平成6年6月1日、水子貝塚公園(愛称「縄文ふれあい広場」)として一般公開されました。</p>	<p>①(範囲・規模・保護行政) 縄文ふれあい広場(水子貝塚公園)平面図</p> <p>②(発掘前)埋もだつたごろの水子貝塚</p> <p>(出土物)</p> <p>③貝層下土器出土状態</p> <p>④貝層内焚火跡</p> <p>⑤縄文人骨</p> <p>⑥鉱物製垂飾出土土器</p> <p>⑦人骨そば出土土器</p> <p>⑧石皿、上器</p> <p>⑨埋蔵犬</p>	
1995 上高津貝塚	<p>国指定史跡 上高津貝塚</p> <p>1. 所在地：茨城県土浦市大字上高津字貝塚、祐久保、大字穴坂字吉久保地内 2. 時代：今からおよそ 3,000~4,000 年前(縄文時代後・晚期) 3. 今までの経過：(研究活動)上高津貝塚は、1906年(明治39年)に大衆小説家江見水蔵によって発掘されてから、考古学の世界に知られるようになりました。その後、1968~1971年にかけて慶應大学・東京大学により継続的な調査が行なわれ、土器、石器、土偶など多くの貴重な資料が発見されました。(保護行政)その後、1977年に国の史跡指定を受け、台地から斜面にかけての約4.4ヘクタールが国指定史跡となっています。そして、毎年にわたり地元住民の耕作地として保存されてきた貝塚は、1981~1986年に市が指定地を購入し、1991~1995年にかけて文化庁などの補助を受けて現在のように整備されました。4. 上高津貝塚の特徴：上高津貝塚は、(地形)まわりを小さな谷に囲まれた台地の縁に(形状)A・B・C・Dの四つの貝塚が丸と並んである特徴的な形をしています。(規模)広さが4.4ヘクタールもあり、千葉県の加曽利貝塚や茨城県美浦村の陸平貝塚などと並んで全国でも有数な大きな貝塚の一つです。(研究成果)貝塚は、縄文時代の人々のゴミ捨て場とも言われていますが、上高津貝塚のよう大きな貝塚は、干し貝を大量に作る加工場だったのではないかとも考えられています。貝のとれない内陸の人たちとの物々交換に使われていたのでしょうか。(出土物)貝塚からは、ヤマトシジミやハマグリなどの貝がら、マダイ、クロダイ、スズキなどの魚の骨がたくさん出土します。(研究成果)マダイを除いた多くの魚は河口近くでとれるものであり、當時霞ヶ浦が太平洋につながる内海であったことがわかります。波静かな入り江をのぞむ上高津貝塚は、貝や魚をとるには絶好の自然環境にあったと言えるでしょう。</p> <p>国指定史跡 上高津貝塚ふるさと歴史の広場</p> <p>(保護行政)この広場は、縄文時代の人たちがつくった「貝塚」をとおして、今の私たちの生活を考えるために整備したものです。この史跡整備は、今までに行われた発掘調査をはじめ、いろいろな調査によって分かったことをもとに、文化庁などの指導をもとに進行しています。ここにある復元された住居や生活のあとは、貝塚のつくられた縄文時代のほんの一部分なのですが、ここを訪れられたみなさまの中に、何か大切なものを残してくれるものと思います。この広場に来てくださったみなさまへ(価値と意義)この広場は、縄文時代の人たちが私たちに残してくれた宝物です。(保護行政)広場の中の施設や展示物を大切にしましょう。</p> <p>文化庁・土浦市 1995年10月</p>	<p>(範囲・形状・保護行政) 国指定史跡上高津貝塚ふるさと歴史の広場平面図</p>	

山崎貝塚 1996	史跡 山崎貝塚 野田市山崎貝塚町 26番地の4 瞬和51年12月23日指定 平成7年1月30日追加指定 面積 17,213.07 m <sup>2</sup> (位置)山崎貝塚は、野田市の南部、野田丘陵上に位置する。(時代)縄文時代中期から晩期の貝塚をともなう集落跡である。(形状)貝塚は、全体として環状を呈するが、東の谷とその反対側で口を開き、半円弧が向きあつた形状をしている。(出土物)縄文中期中葉から後期、晩期後葉の土器、石器、耳飾り、土偶などが出土し、貝層中には各種の獸骨などが遺存し、(価値と意義)当時の食料資源、食料獲得などを解明する上で重要な遺跡である。 昭和60年3月1日 平成8年11月1日修正 文化庁 千葉県教育委員会 野田市教育委員会	①(位置・交通) 史跡山崎貝塚案内図 ②(範囲・形状・保護行政) 山崎貝塚平面図
黒浜貝塚 2019	国指定史跡 黒浜貝塚 黒浜貝塚とは (時代)黒浜貝塚は、今から約5,000~6,000年前の縄文時代前期の集落遺跡です。また、(価値と意義)「黒浜式土器」の標式遺跡として重要な遺跡です。史跡内には、(地形)谷を挟んで竪穴住居が2つあります。このうち宿泊のムラは、(形状)溝地の広場を囲んで竪穴住居が円形に並んでいます。(自然環境)この時期、地球全体が約2~3°C暖かく、大陸の高山地帯などの氷河が溶けて海に流れ込み、海水が内陸湖まで入り込む「縄文海進」という現象が起きました。(発見)当時の海岸線に沿って黒浜貝塚をはじめ、19ヶ所の貝塚が蓮田市内に残されています。(出土物)差掘調査によってハイガイやマガキ、ハマグリ、ヤマトシジミなどの貝類やスズキなどの魚類、ガサミなどの甲殻類のほか、イノシシなどの動物の骨が見つかっています。(保護行政)削削されていたイヌの埋葬骨も注目されます。平成18年(2005年)には、考古学的価値と貴重な自然環境が残されていることが評価され、国史跡に指定されました。史跡内は溝地の広場や当時の波打ち際など、縄文時代の景観を復元しています。	①(範囲・形状・保護行政) 黒浜貝塚平面図(現在地) (出土物) ②4号住居跡: ③出土したイヌの骨: ④黒浜式土器:
加曾利貝塚 2021	特別史跡 加曾利貝塚 (時代)加曾利貝塚は集落がつくられたのは、縄文時代中期中頃(約5,000年前)から晩期中頃(約3,000年前)です。(規模・形状)中期後半には直径約140mで環状の北貝塚が、後期前半(約4,000年前)には長径約190mで馬蹄形の南貝塚がつくられ、上空から見ると時期の異なる2つの貝塚が8の字状に連続しています。集落を伴う貝塚としては日本最大級の規模です。明治時代から遺跡の価値が広く知られ、(研究活動)研究者や市民等が参加した発掘調査が行われてきました。(保存運動)1960年代には開発の計画が持ち上がったものの、国会を巻き込んだ市民主体の遺跡保存運動が行われました。(保護行政)1971年(昭和46年)に国史跡、2017(平成29年)に特別史跡に指定されました。 2021(令和3年)3月	①(範囲) 加曾利貝塚空撮 ②(出土物) 貝層剥ぎ取り
堀之内貝塚 2021	国指定史跡 堀之内貝塚 指定年月日 昭和三十九年七月六日 昭和四十二年六月二十二日(追加) 昭和四十七年二月三日(追加) 指定面積 二点、七八九・八五平方メートル 堀之内貝塚は、(位置)千葉県北部に広がる下総台地の西南端にあります。(時代)縄文時代後期から晩期(約四〇〇〇~二五〇〇年前)にかけての、この地域の中心的な集落でした。(地形)遺跡は、南を道免き谷津、北を千艘谷津という谷にはまれた、堀い尾根状の台地にあります。(規模)貝塚の規模は、外形で東西約二二五m、南北約三〇mです。貝殻の散布は、南北の両斜面と、西は台地上にあります。西端の一部は造り出されています。(形状)全体としてはU字形をなす斜面の馬蹄形貝塚です。(研究活動)堀之内貝塚には、明治時代から多くの考古学者や愛好家がおとずれています。明治三七年(一九〇四)に堀之内貝塚で開催された東京人類学会第1回遠足会の発掘成果が学会記に報告されたり、江見水蔵氏の考古小説「地底探検記」で紹介されたことにより、遺跡の名前が全国的に知られるようになりました。その後、大正六年(一九〇七)と大正一〇年に収集された土器に違いのあることに気づいた山内清男氏は、昭和一五年(一九四〇)に、この資料を基準に堀之内1式土器と堀之内2式土器を提唱しました。その後も、昭和二九年(一九五四)の日本人類学会から委託された早稲田・慶應義塾・明治大学による発掘と地形測量、昭和三八年の明治大学による、最後となったB地点の発掘まで、多くの発掘がくりかえしあなこなされました。(出土物)貝は、イギキザガという小さな巻貝とハマグリが最も多く、晩期になると、ハマグリに加えてオキシジミが多くなります。魚では内湾を好むクロダイが多く、珍しいところでは、コウイカというイカの仲間が多いことが特色です。陸獣では、イノシシとニホンジカが主な食料でしたが、主食は木の実などの植物であったと考えられます。これまでの発掘は、部分的なもので、全容は不明です。竪穴建物跡(住居跡)は台地の上から斜面にかけて、人骨は斜面から発見されています。すぐ南側にある道免き谷津遺跡から、トチの実のアカ抜きをする木組みの施設や舟をこぐ櫓が発見されたことから、(研究成果)本貝塚の縄文人たちがトチの実を食べたり、丸舟舟で海に出て貝や魚をとっていたことがわかりました。 令和三年三月 市川市教育委員会	①(範囲・形状・研究活動) 国指定史跡堀之内貝塚現状図 ②(出土物)堀之内式土器 ③(マルチメディア解説) 動画と音声ガイドのQRコード

れ、以降昭和37年5月まで数多くの調査が行われました」は、貝塚の調査や発掘といった学術的な活動を述べているため、(研究活動)を追記した。「1軒の竪穴住居の床に、5体の人骨が発見され、人員構成や家族の問題を考えるうえで、重要な資料となりました。なお、人骨が143体も出てきたのは、日本で第3番目に多く、縄文人の形質を研究する上で非常に貢献しました」では、遺跡の価値や意義が述べられているため、(価値と意義)を追記した。最後の一文「この結果、国の史跡に指定され、全域を公有化しました」は、行政の遺跡保護措置について述べているため、文の前の括弧に(保護政策)を追記した。文字情報の他に、総合解説板には二つの図が掲載されている。「姥山貝塚の地形と貝の分布・発掘地点(現在地)」と題された図は、史跡の地形、範囲、そして研究活動を反映して

おり、「大正15年撮影の姥山貝塚航空写真」と題された図は、史跡の範囲と形状を示している。これらは表2内「図」の箇所に追記した。

その後、全ての貝塚遺跡の総合解説板に記載されている文字と画像の情報を整理し、表3に示す結果を得た。各解説板に記載されているすべての情報は、明確に示されている史跡名、指定時間、指定面積、所在地を除き、(位置)、(地形)、(時代)、(規模)、(形状)、(出土物)、(研究活動(学術))、(保護政策(行政))、(研究成果)、(価値と意義)の10のカテゴリーに分類される。前8つのカテゴリーは遺跡に関する客観的な事実の記述であり、すべての遺跡の解説板では、これらの事実が詳細に説明され、その説明が文章の大部分を占め、全部の画像内容も含んでいる。具体的には、「C字形」、「馬蹄形」、「環状」、「8字形」などの語彙

表3 関東地方における整備済み貝塚史跡8基の総合解説板の内容情報類別

史跡 名称	貝塚史跡の総合解説板の内容の情報類別									
	位 置	地 形	時 代	出 土 物	規 模	形 状	研究 活動 (学術)	保 護 政 策 (行政)	研究 成 果	価 値 と 意 義
姥山 貝塚 1982	○	○	○	○	C字形 馬蹄形貝塚	○	○	○	なし	竪穴住居と人骨の発見は、人 員構成や家族の問題を考える うえで、重要な資料となつた。 人骨が143体も出てきたのは、 日本で第3番目に多く、 縄文人の形質を研究する上で 非常に貢献した。
曾谷 貝塚 1989	○	○	○	○	C字や U字形 馬蹄形貝塚	○	○	○	クリ、トチノミ、いろいろなドン グリの実が、大量に採集され、保 存食にもなつた。イノシシやニホ ンジカなどのいる山野であり、弓 矢などでとつていていた。貝や魚は、 おそらく2km以上離れている菅 野付近まで出かけ、海辺の干涸で ハマグリなどの貝をとり、また海 に出てスズキやクロダイなどの魚 をとつていていた。	例数の少ない「曾谷式土器」 を発見しようというが、そ の後の曾谷貝塚調査の重要な テーマだった。
水子 貝塚 1994	○	○	○	○	環状	○	○	○	なし	小貝塚の分布から貝塚形成当 時の集落の規模形態を推測し うる遺跡として学術上価値が 高い。
上高津 貝塚 1995	○	○	○	○	丸く並んで いる	○	○	○	貝塚は、縄文時代の人々のゴミ捨 て場とも言われているが、上高津 貝塚のような大きな貝塚は、干し 貝を大量に作る加工場だった。貝 のとれない内陸の人たちとの物々 交換に使われていた。 当時霞ヶ浦が太平洋につながる内 海であったことがわかる。	縄文時代の人たちが私たちに 残してくれた宝物。
山崎 貝塚 1996	○	○	○	○	全体として 環状				なし	当時の食料資源、食料獲得な どを解明する上で重要な遺跡 だ。
黒浜 貝塚 2019	○	○	○	○	円形に並ん でいる		○	○	なし	「黒浜式土器」の標式遺跡と して重要な遺跡。考古学的価 値と貴重な自然環境。
加賀利 貝塚 2021	○	○	○	○	馬蹄形の南 貝塚 2つの貝塚 が8の字状 に連結	○	○	○	なし	なし
堀之内 貝塚 2021	○	○	○	○	U字形 馬蹄形貝塚				本貝塚の縄文人たちがトチの実を 食べたり、丸木舟で海に出て貝や 魚をとつていたことがわがりまし た。	なし

が遺跡の形状を修飾するために一般的に使用され、遺跡の規模を数値で記述した後には、「最も大規模」、「日本有数の規模」などの補足説明が頻繁に使用されている。また、出土品の記述では、遺物の名前と数量を多く列挙するだけでなく、「日本で初めて」、「第3番目に多い」などの強調表現も見られる。一方で、(研究成果)と(価値と意義)の2つのカテゴリーは史跡研究の上で得られるものであり、これらの部分は最も史跡の価値と魅力を体现し、訪問者に影響を与える可能性があるが、すべての史跡がこれらの内容を解説板に記載しているわけではない。

曾谷貝塚、上高津貝塚、堀之内貝塚の解説板では、(研究成果)が記述されている。具体的には、曾谷貝

塚では、その地域の縄文人が豊かな自然資源を利用して食物を得る生活風景を描き出している。一方、上高津貝塚では、過去の貝塚が「ゴミ捨て場」であるという一元的な理解を越えて、上高津貝塚を「加工場」と定義し、縄文人の物々交換の生産方式を描き出した。さらに、出土した魚類からこの場所がかつて太平洋の内海であったことを確認した。堀之内貝塚では、出土物の発見に基づき、この地域の縄文人の食生活と丸木舟を使用した漁生活の様子を語った。しかしながら、大量の調査発掘成果を持つにもかかわらず、これらの新知識の産出と更新は非常に限られていることが見受けられる。

そして最も重要な(価値と意義)についての記述で

も、同様に不十分さと曖昧さが見受けられる。姥山貝塚の総合解説板では、(価値と意義)についての説明は、「竪穴住居と人骨の発見は、人員構成や家族の問題を考えるうえで、重要な資料となった。人骨が143体も出てきたのは、日本で第3番目に多く、縄文人の形質を研究する上で非常に貢献した」とされている。しかし、ここでは二つの研究問題が提起されているだけで、解答は見られない。「重要な資料」、「非常に貢献した」といった程度を表す言葉は、遺跡の価値を実質的に証明するものではない。同様に、山崎貝塚の解説板に記載した「当時の食料資源、食料獲得などを解明する上で重要な遺跡だ」と水子貝塚の解説板に記載した「小貝塚の分布から貝塚形成当時の集落の規模形態を推測しうる遺跡として学術上価値が高い」の価値説明も、考古学的な研究問題を提起したところで止まっている。一方、曾谷貝塚の解説板に記載した「例数の少ない『曾谷式土器』を発見しようというのが、その後の曾谷貝塚調査の重要なテーマだった」や黒浜貝塚の解説板に記載した「『黒浜式土器』の標式遺跡として重要な遺跡」の「○○式土器」の標式遺跡としての重要性は、考古学の専門的な視点からは非常に重要であるが、これらの語彙パターンは一般には広く知られておらず、説明なしに使用することは考古学の報告書の慣習を示している。これ以上の説明がない場合には、発見自体が貝塚の価値を効果的に伝えることはできない。さらに、上高津貝塚は遺跡に対して、解説板に記載した「縄文時代の人たちが私たちに残してくれた宝物」という判断を与えているが、これは遺跡を静的な視点で見ているだけでなく、具体的な価値認識の面でも不明確である。また、加曾利貝塚と堀之内貝塚の総合解説板には、価値や重要性についての記述はない。

全体的に見ると、貝塚史跡の総合解説板の内容は、「事実説明」の傾向が強い。1980年に、後藤和民氏が「『8字形』とか『日本最大の規模』という従来の認識は、皮相的な把握であり、貝塚そのものの実質的な意義とはあまり関係のない現象である。また、その貝の量の膨大さを論ずるにしても、従来のように貝塚を単なる『ゴミ捨て場』として捉える以上、さほど重要な

問題ではない」<sup>19)</sup>と指摘した。しかし、1982年から2021年に設置された上記の総合解説板の情報では、皮相的な事実の紹介が依然として繰り返されており、地理的な位置、年代情報、考古学的な形態学に基づき解釈するだけでは、史跡の価値を充分に説明できているとは言えない。

2017年、Reuben Grima 氏の研究では、「アクセシビリティ (Accessibility)」が考古遺跡の解釈と訪問者の体験を通しての中心テーマとして提出され、「Intellectual」、「Physical」、「Financial」の三方面的のアクセシビリティの重要性が強調されている<sup>20)</sup>。「Intellectual」のアクセシビリティを実現するために、更なる研究課題を提出することを提唱している。人々の間での団結や対立、病気や富、地域についての異なる季節の気候がもたらす制約と機会を考え、それに対応し利用する人々の戦略などを研究することで、研究成果の物語性と解釈を増やすことを求めている。また、遺跡価値を中心とした評価システムは、「何であるか」だけでなく、「なぜ」、「誰によって」、「どのように」、「誰のために」といった多次元的な問い合わせリストアップすることで、遺跡の解釈を広げる研究も増えている<sup>21)</sup>。遺跡の価値を具体的に把握することで、類似した遺跡と区別することが可能となり、その後の遺跡展示に堅固な基盤を築くことができる。

潜在化して見えにくくなった史跡等の本質的価値を目で見える形でわかりやすく顕在化するために、遺構の価値を充分に理解することが遺構表現の前提である<sup>22)</sup>。遺跡の価値を十分に認識していない場合、貝塚の遺構を表現する際は、空中楼閣を築くような難題に直面するであろう。

### 3. 今までの貝塚遺跡の表現手法

過去、経済開発と建設ブームの中で、遺跡の「保存」は最優先される課題であったが、先代の学者たちの尽力により、史跡保護は今社会的に共感される価値となっている。そして、保存された後の遺跡が持つ文化的価値をどう表現するか、これが現代の史跡整備の課題である。

1986年に出版された『図説発掘が語る日本史 別巻 整備・復元された遺跡』では、貝塚遺跡の整備を貝層の広がりの表示方法や貝層断面の展観方式に基づき、いくつかのタイプに分類している。貝層の広がりの表示方法によって、千葉県の加曾利貝塚や姥山貝塚では、貝層の広がる範囲を若干盛土し、周囲に縁石をまわして表示している。堀之内貝塚は、遺跡の現状がこんもりとした森となっているが、この森の中に園路を造成し、貝層は標柱によって地点表示を行っている。また、山崎貝塚では、遺跡の整備前の現状が畠地の中に貝殻や土器片が混ざりあった貝塚特有の景観であったため、整備でもこれと同じ状態を維持すべく、貝層外縁に園路を設けただけで、貝層部分は年に数回耕耘する管理を行い、畠地と同じ状態をつくり出している。貝層断面の展観は覆屋と剥ぎ取りの二種類の方法が行われている。加曾利貝塚では野外展示としては、北貝塚の一部を開削して覆屋を架け、貝層の断面観覧施設を設けるほか、同じく北貝塚の一画に竪穴式住居跡を露出展示する覆屋を設置している<sup>23)</sup>。

2005年の『史跡等整備のてびき』では、遺跡の表現は、「遺跡空間の表現」、「遺構の表現」及び「解説・展示」の3つに区分されている<sup>24)</sup>。適切な貝層の表現方法の選択について、「貝層の平面表示」、「貝層の断面表示」、そして「遺構露出展示」の三つが提案されている<sup>25)</sup>。表現方法について選択肢が限られることで同質化現象を引き起こす恐れがあるので、ここでは、整備された8つの貝塚遺跡の貝層の表現方法を研究対象とし、それらの意思決定プロセスを詳しく検討することで、特定の表現方式が選ばれた理由を明らかにする。

史跡の貝塚の整備報告書などから、各遺跡が整備プロセスで貝層遺構の表現方法についてどのような意思決定をしたか、そしてどのような要素を考慮に入れたかが明らかになる。関東地域の貝塚遺跡整備の先駆である加曾利貝塚は1968年に北貝塚の貝層断面観覧施設を完成した<sup>26)</sup>。70年代から80年代にかけて、姥山貝塚は盛土後の貝層の位置にクローバーなどを播種し<sup>27)</sup>、境界に自然石を敷いた<sup>28)</sup>。山崎貝塚と堀之内貝塚は盛土保存を行わず貝を露出させて展示した<sup>29)</sup>。曾谷貝塚はこれら4つの貝塚の長所と短所を批判した後、姥山

貝塚の植物で貝塚を示す方法を継承し、さらに人工的に別の貝を採取して盛土の表面に撒き、観光客が手に取って見られるように整備した<sup>30)</sup>。90年代に入ると、水子貝塚は貝塚の分布範囲に相当する地上部分に低く盛土し、盛土上に白い丸いタイルで貝塚の範囲を示し、集落ゾーンでは実際の貝殻を散布して貝塚の存在を示した<sup>31)</sup>。上高津貝塚は貝層断面を展示すると同時に、貝や土器片を含む表土を保持し、盛土保護後に表土を覆い、貝層表面の原風景を展示した<sup>32)</sup>。

2023年に整備を完了した黒浜貝塚は、個性を強調する考え方のもと、盛土保存後に遺構の配置、規模、形状などを平面的な情報として表現する「平面表示」を基本に、AR（拡張現実）表示を活用した<sup>33)</sup>。さらに、整備計画段階にある神明貝塚も、その保存活用計画書で山崎貝塚のような露出展示を検討すると表明した<sup>34)</sup>。

整備の実践が進む一方で、貝層遺構の表現方法がもたらす問題も次第に明らかになってきた。上述の各遺跡における貝層遺構の表現方法は、以前の整備実践の批判と継承を基にした選択であり、表5に示すものはそれらの批判である。これらの批判の内容に基づいて、各貝塚が整備時に以前の方法の長所と短所をどのように認識し、どの基準で評価を行ったかをまとめることができる。このまとめを通じて、これまでの関東地域の貝層表現方法の発展経緯が明確になる。

山崎貝塚では貝塚の位置と形状の可視性を重視し、加曾利南貝塚は遺跡の物理的アクセシビリティを研究者から一般市民へと拡大することを要求した。曾谷貝塚は貝塚の位置と形状の可視性、展示効果、貝塚の保護を考慮したが、管理施設の欠如と人手不足という現実的な問題から、管理の便宜性が決定的な指標となった。水子貝塚は植栽などで貝層の範囲を表示の方法を再考し、この立体表示の方法では貝塚本体が注目を失ってしまうと考えた。上高津貝塚は貝層内の内容の表現に注目し、さらに新たな突破が黒浜貝塚で見られた。黒浜貝塚では、遺跡自体の特性と個性を出発点とした貝層表現を行い、多くの共通点を持つ水子貝塚と同じ整備をすることを意識的に避けた。さらに、黒浜貝塚は貝層価値の表現にも一歩進んでいる。段階別の調査時点の3D撮影データを基に、動画を使って廃

絶壁穴住居が貝塚になる過程を紹介し、静的な展示とは全く異なる、研究成果を訪問者に伝達した。

これらの整備実践を経て、これまでの貝層表現について、次のような認識が蓄積された。貝層遺構保存の認識上、遺構を確実に保存するためには盛土保存が有効であると考えられているが、盛土保存は貝塚の位置、形状の可視性と一般市民の遺跡への物理的なアクセビリティーを妨げている。貝層遺構表現には、本物の露出の有無に応じて遺構展示と遺構表示の2つの方法がある。貝殻露出展示で貝塚範囲を表示する方法は貝塚の位置、形状の視認性を保証するが、維持管理が困難であることが欠点である。断面展示は発掘時の臨場感をもたらし、訪問者に貝層の価値を自主的に認識する機会を与えたが、同時に保存技術が不足している場合は貝層の保護と展示効果に影響を与える。遺構表示は保存と管理に最も便利であるが、実物が不足している場合には遺跡価値を効果的に伝えることができない。最新のAR・VRの使用は、貝層表現上の独自性を一時的に保持し、遺跡価値伝達の情報量を増加させ、研究進展の更新が便利であることと、デジタルデータ自体は劣化しないという利点があるが、遺跡本体の展示は全く消えてしまった。整備全体の歴史的発展過程は、整備すればするほど、本物の遺構が見えなくなる傾向を示している。

表4における往時の貝層遺構保存と表現方法に対する批判

る批判の基準を、表5における各貝塚史跡の貝層遺構保存・表現方法の理由と併せて、どのような目的のためであるかを知ることができる。ここでは、意思決定の考慮は訪問者（一般市民）、管理者、研究者に向けられており、これらの人々は異なる整備結果の下で異なる影響を受けると考えられていることが見られる。ステークホルダー理論に照らし合わせると、以上の関係者は貝塚遺跡整備の重要なステークホルダーとして位置づけられる。

全体的に、貝塚史跡の貝層遺構表現方法については以下の3つの傾向がある。まず、貝層遺構表現方法の同質化の傾向が明確に確認できた。曾谷貝塚は姥山貝塚の貝層表現方法（盛土保存+平面表示+立体表示）を複製し、神明貝塚では計画書にて山崎貝塚の露出展示による整備を検討すると明記されていた。後來の貝層表現方法の選択は、既存の表現方法からの継承が多い。次に、「保存第一」の傾向が顕著である。保存技術、財政支援、管理能力の制限の中で、AR・VRの導入における貝層の実物展示に対する意欲は減退傾向にある。また、遺跡の価値を説明する上で、研究進展をどのように展示するかについての考慮が大幅に欠けている。価値の表現の大部分は位置、範囲、規模、含有物に留まっており、これは前議論された整備前の価値認識の不足に制約されていると考えている。AR・VRを使用した黒浜貝塚でさえ、黒浜貝塚と水子貝塚

表4 関東地方貝塚史跡整備中貝層表現に対する既往方法の批判

史跡名称 (貝塚整備完成時期)	既往方法への批判
山崎貝塚(1984)	貝塚の整備は往々にして、貝塚を覆うような傾向にはじり、貝塚の全面を露出しないことが多い。貝塚がどこにあるのか、どのような形をしているのかが分かりづらい <sup>35)</sup> 。
加曾利貝塚 南貝塚(1989)	從来まで地下に埋没している文化財の状況を見る機会は、一般市民にはほとんどなく、それは発掘調査に携わる研究者や一部専門家に限られていた <sup>36)</sup> 。
曾谷貝塚 1989	現在整備されているいざれの貝塚でもいえることであるが、一般の人々が見学にきて貝層がどこにあるのか、どのような形でしているのかがわかりづらい。姥山貝塚で試みられたような盛土後クローバー等の播種、あるいは灌木の植栽より貝塚部の保護を図りつつ、立体的な整備を行うより、一目でわかるような状況とする。山崎貝塚や一部、堀之内貝塚でとり入れたように、貝殻を露出させる方法も考えられるが、これは貝塚表面の貝殻が破碎したり風化したりして保存上好ましくない状況も見られる。加曾利貝塚・蟻塚で、貝層断面などは、カビの発生などにより展示効果や貝塚の保護が少なからず損なわれている <sup>37)</sup> 。
水子貝塚1994	植栽・カラー舗装等で、貝塚の範囲を表示する案の問題点は、貝塚であることが一般に分かりにくくイメージしづらい。樹脂で固定した貝殻で貝塚の範囲を表示する案の問題点は、貝塚の様子を最も正確に示すが、強度の点で不安があり、維持管理が困難である <sup>38)</sup> 。
上高津貝塚 1995	今まで行われていた平面表示方法が、貝層上面を保護被覆するため特色である貝や土器等の散布が見えなくなってしまい、来館者に分かり難いという指摘を受けていたため、上高津貝塚の整備では散布状況が見えるような方法を取ることにした <sup>39)</sup> 。
黒浜貝塚 2023	水子貝塚と黒浜貝塚は、縄文海進最盛期の貝塚で、共通する部分が多くある。しかし、水子貝塚と同じような整備をしていたら、水子貝塚に似たような史跡が増えたよねだけ終わった可能性がある。史跡の特徴と個性を注意していかないといけない。また、全国的に見ても、AR・VRを用いた整備は多く無かった <sup>40)</sup> 。

表5 貝塚史跡の貝層遺構保存・表現方法とその理由

史跡名称・ (貝塚整備 完成時期)	遺 構 保 存	遺構の表現方法					理 由	
		遺構展示 (本物)		遺構表示 (非本物)				
		盛 土 保 存	平 面 展 示	断 面 展 示	平 面 表 示	立 体 表 示	AR VR	
加曾利貝塚 北貝塚 (1968)		○						—
姥山貝塚 (1983)		○	○	○				—
山崎貝塚 (1984)		○						ではできるだけ、貝塚そのものを露出しておきたい <sup>43)</sup>
堀之内貝塚 (1985)		○						—
加曾利貝塚 南貝塚 (1989)		○	○	○				<p>① 遺構面の保存科学的処置と半永久的な建築物によって、いつでも、だれでも自由に遺跡内部を観察できる。</p> <p>② 実物展示の圧倒的な迫力。</p> <p>③ 貝層断面を観察することで、解説者の方的な解釈を受け入れるだけでなく、自主的な観点によって直接、実感をもって発見、判断できる。</p> <p>④ 当時の「むらびと」たちの目的や意志を追求するため、貝層断面が必要。堆積状態を断面で観察することは、当時の人のびとの貝類の採集、加工、投棄などの具体的な行動を、時間的な流れの中で捉えるには有効な方法。</p> <p>⑤ 発掘報告書が限られた観点にもとづく特定な解釈にすぎない。貝層断面そのものが現地に固定されていることは、報告書の内容に疑問を抱いた者が現地でもう一度貝層を確かめてみることはできる。さまざまな観点や問題意識をもって、誰でも何度も再検討することのできる可能性が確保できる<sup>44)</sup>。</p>
曾谷貝塚 (1989)		○	○	○				<p>① 一目でわかるように。</p> <p>② 貝塚表面の貝殻が破碎したり風化したりして保存上好ましくない<sup>45)</sup>。</p>
水子貝塚 (1994)		○		○				<p>① 現在の保存技術では、遺構を露出した状態で長期間保存することは困難であり、地中に埋没させておくことが最も良い。さらに、環状に分布する各地点貝塚を含むドーナツ状の範囲は立入禁止とし、最大限の保護保存策とする。</p> <p>② 地点貝塚が環状に分布している様子が目視でき、かつ、できるかぎり自然で一般に分かりやすい表示をめざす。</p> <p>③ 貝塚表示手法としては、貝塚の形態をある程度表現でき、かつ、維持・管理上も問題点が少ない案を選択<sup>46)</sup>。</p>
上高津貝塚 (1995)		○	○	○				<p>① 貝塚の広がりを体感する。</p> <p>② 貝塚の特色ができるだけ分かりやすくなるようにすることを目的として整備を実施している。</p> <p>③ 貝塚の地中にいるような雰囲気を創出することを目標にした<sup>47)</sup>。</p>
黒浜貝塚 (2023)		○		○	○			<p>① 廃絶豊穴住居が貝塚になるまでの過程は、言葉で理解できない部分が多いので、段階別で調査時点の3D撮影のデータを基に、動画での紹介の方がアリティを感じられる。</p> <p>② AR、VRのデジタルデータ自体は劣化しない。</p> <p>③ 学術調査の新事例にも比較的早く対応できるという利点がある<sup>48)</sup>。</p>

との共通点を認識した後、整備方法の個性への注目が遺跡本来の価値の発掘を上回っている。後者こそが遺跡の整備結果のユニーク性を維持する源であると考える。

これらの遺跡の整備過程においては、管理者、訪問者、研究者といった主要なステークホルダーのニーズが考慮されていることが窺い知れる。しかしながら、史跡整備に関わる人々はこれらに限定されない。次に、史跡整備に関連するさらなるステークホルダーについて探求し、彼らが史跡の整備の同質化とどのように関連しているのかを検討する。

#### 4. 史跡整備のステークホルダー

ステークホルダー理論は経営学の研究領域から生ま

れ、定義は「組織体の目的の遂行に影響するか影響を受けるグループまたは個人」<sup>49)</sup>である。近年、考古学的遺跡の整備における世界中の研究と実践で、ステークホルダー分析が広く注目されている。遺跡の埋め戻しを最適化する意思決定<sup>50)</sup>、地域住民の遺跡管理への参加を促進すること<sup>51)</sup>、そして考古学公園が観光産業においてその価値を発揮し、さらにその保護を促進すること<sup>52)</sup>など、多岐にわたる問題に対して議論が進んでいる。

日本の史跡整備において、ステークホルダーに関する議論も少なくない。例えば、埋蔵文化財担当職員や考古学系学芸員が直面する困難と挑戦<sup>53)</sup>、遺跡整備・保存をめぐるコンサルタントの役割<sup>54)</sup>、考古学家、造園学家、歴史学家、建築学家を中心とした専門家のパートナーシップ<sup>55)</sup>、及び「官・学・産・民」の遺跡

活用のコラボレーション<sup>54)</sup>など、それぞれ異なるステークホルダーが史跡整備における役割や、史跡整備の結果に対する期待と要求の研究が進んでいる。

ここでは、史跡整備における同質化の問題に焦点を当て、以下の二つのステークホルダーの分析を通じて、同質化との関連性を検証したい。

### (1) 史跡整備担当者

現在、史跡整備を担当している大部分の自治体職員は、大学で考古学を専攻し埋蔵文化財を専門とする職員である<sup>55)</sup>。文化庁が刊行している『埋蔵文化財統計資料』の令和4年度版<sup>56)</sup>を見ると、史跡の指定件数が年々増加している一方で、埋蔵文化財専門職員の数は平成12年をピークに急速に減少し、全体的な下降傾向を示している。専門職員は増え続ける史跡整備のニーズに直面しており、業務量が増大しているため、その負担は軽いとは言えない。

さらに、年齢構造に基づいて、多くの専門職員が近い将来、定年退職を迎えることとなる。史跡の保存活用計画は長期的な策定と実施が求められる中、担当者不足という問題に直面している。

史跡整備行政の学問構造において、考古学を専攻した史跡整備担当職員が中心となる自治体とは対照的に、文化庁の整備部門の職員は造園や庭園などを専門とする技術系職員が主体である<sup>57)</sup>。しかし、技術系職員の人数は、同様に楽観的とは言えない状況にある。1986年に安原啓示氏が言及したところによれば、奈良国立文化財研究所の職員を含め、遺跡の整備を業務とする造園学専門の職員は日本全国でわずか12名しかいないとのことである<sup>58)</sup>。

また、考古学や造園学、現代の「文化遺産」として社会還元的な史跡整備の要求とは、完全に一致しているわけではなく、学問の理念上、知的および認識論的な違いが存在している。史跡整備という新たなカテゴリーを仕事として取り入れるために、現状や情報の整理・分析する必要性が指摘されている<sup>59)</sup>。このような状況で、奈良文化財研究所が遺跡整備の研修は1977年から継続行われており、2005年文化庁は「史跡等整備の手引き」を刊行し、優れた事例を提供しており、各地域の史跡整備担当者に整備の方針や具体的な整備方

法の参考を提供している。

しかし、史跡整備の同質化の本質として挙げられるのは、情報受容の同質化、思考方法の同質化、美の認識の同質化、そして価値観の同質化である。真剣に情報収集し分析する努力の下、優れた事例に囲まれている中で、「情報の繭」が形成され、新しいアイディアや方法を模索するスペースが限られてきている。実際、各遺跡はそれぞれ独自の環境と特性を持っているが、もし全てが自らと優れた事例との共通点を見つけることに焦点を当てるなら、整備の結果は同質化するばかりか、しかも多くの場合、最低基準にとどまる可能性が高い。このような標準化には、十分な注意が必要である。

一方、遠隔の農村地域の遺跡にとって、専門職員の不足、財政の制約、交通の不便、そして高齢化・少子化といった社会的背景の中で、例えば茨城県美浦村の陸平貝塚のような遺跡は、いくら「優れた事例」を学んだとしても、現地に適用することは難しい。そのため、同じ類型の遺跡であっても、異なる自然や社会的

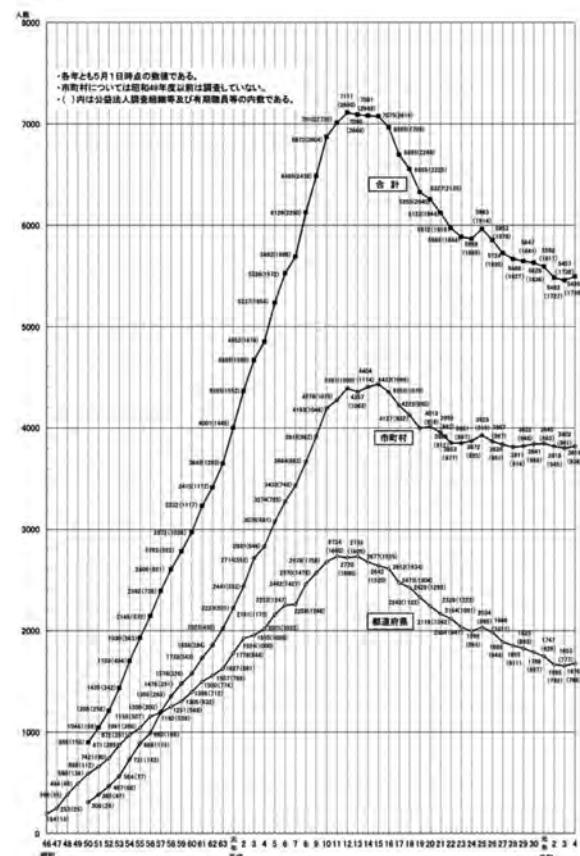


図5 埋蔵文化財専門職員数の推移図（1971-2023）

背景の中での取り組みを一律に考えることはできない。現在、遺跡の類型に基づいて指導を行っているものよりも、遺跡が存在する異なる社会的状況や、関連するステークホルダーの異なるニーズなどに焦点を当てた参考資料やガイドラインが更に提供されれば、それが担当者たちが自らの整備計画を策定する上での助けとなり、現在の同質化の状況を打破するのに有効であると考える。

## (2) 専門家パートナーシップ

史跡整備に関して、抽象的な言葉で表現されている段階では観念的に理解されるかもしれないが、具体的な計画や詳細な図に落とし込むとき、専門家以外には認識し難い実際の課題が生じる可能性がある。このため、具体的な史跡整備計画を策定する場合、その観点や条件を十分に反映し、適正に生かすためには、関連する専門家や関係者の協力が不可欠である<sup>60)</sup>。

『史跡等整備の手引き』では、専門的視点からの検討委員会の設置が規定されている。その理由として、「遺跡の表現」の適切な技術の適用は、当該史跡等に関する広く詳細な理解を基礎としていることから、当該史跡等の空間全体及び個別の遺構等の意味とその価値について、専門家等を交えて十分議論を尽くすことが重要である<sup>61)</sup>と強調されている。表6では、関東地方各史跡貝塚の整備報告書等の資料に基づいて、整備過程での各検討委員会の委員構成を例挙し、学識経験者がどの学術分野から来ているかをまとめている。

統計によれば、表6の整備委員会の委員総人数は129人である。委員は行政（市議会選出委員、市職員、文化財保護審議会委員、博物館協議会委員学識経験者）、地元（地権者、地元代表者市民公募）および学問（学識経験者）の各分野から選ばれた。その中で学識経験者は58人で、主導的な位置を占めている。学識経験者の中で、委員たちがそれぞれ所属する分野は歴史学、考古学、植物生態学、植物学、心理学、造園学、緑地、都市計画、地学、地理学、地質学、博物館学、建築学、美術史、歴史地理学、保存科学、まちづくり、観光、活用、ICTとなっている。統計結果の有効性を保つために、「植物生態学」と「植物学」を合わせて「植物学」とし、「造園学」と「緑地」を合わせて

「造園学」とし、「地学」、「地理学」、「地質学」を合わせて「地学」とする。その結果、各分野の人数は次の通りである：考古学（22人）、歴史学（10人）、植物学（5人）、造園学（3人）、都市計画（3人）、地学（3人）、建築学（2人）、観光（2人）、美術史（1人）、歴史地理学（1人）、保存科学（1人）、博物館学（1人）、心理学（1人）、まちづくり（1人）、活用（1人）、ICT（1人）。

パートナーシップの各専門家は各自の役割を果たしており、例えば考古学者は遺跡の価値説明、造園学者は地上の表現、建築学者は建築物の復元を担当し、各専門分野は、その学問の慣習や規範を持っている傾向がある。これから、どのようにお互いにコミュニケーションを拡大するか、例えば地上の表現は遺跡の類型の説明だけでなく、その独自の文化的特性を強調し、どの技術を使用してこの目的を実現するかなど、流れ作業の組み立てではなく、さまざまな専門分野の観点からの徹底的な議論が必要であろう。

史跡整備の担当者や専門家以外にも、地域住民、ボランティア団体、観光業者、観光客なども史跡整備のステークホルダーとして研究者の視野に入っている。将来的には、さらに多くの人々や組織がステークホルダーとして史跡整備の視野に取り入れられる可能性が大きく、これらのステークホルダーを認識・予測して、様々な性格やニーズを分析することで、史跡整備のアイディアが増えると考えている。

各地域は歴史、自然、社会、人口構造、交通などの条件が異なり、さまざまなステークホルダーの状況が存在している。それに合わせて、各史跡の整備方法も具体的な問題に応じた対策を講じる必要がある。同じ類型の遺跡でも、十分に発掘され、その文化的価値を

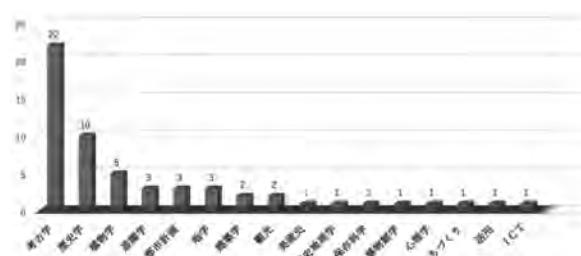


図6 関東地方国指定史跡貝塚遺跡の整備委員会における学識経験者の委員の分野と人数（筆者作成）

表6 史跡貝塚の整備に対する検討委員会の委員構成とその中の学識経験者分野

遺跡名 (設置時期)	委員会構成	委員構成と学識経験者分野
加曾利貝塚 (1979) <sup>64)</sup>	千葉市史跡整備指導委員(12人) 武田宗久、大塚重初、新井重三、沼田真、小室栄一、金子浩昌、小林達雄、岡田茂弘、中民男村、福富久夫、佐々木朝登、矢野和之(秋山邦雄)	学識経験者:歴史学(2)、考古学(4)、植物生態学(1)、心理学(1)、造園学・都市計画(1)、地学(1)、博物館(1)、建築学(1)
山崎貝塚 (1979) <sup>65)</sup>	基本計画の策定にあたって、協議に参加された(13人) 市川盛雄、佐藤真、池松武之亮、児玉道夫、岡田友右エ門、戸邊慶成、茂木正利、遠藤保之、山崎健一、鈴木英二、戸向朝夫、斎藤弘、鈴木将之	野田市文化財保護審議会委員及び野田市博物館協議会委員 学識経験者:明示ではない
曾谷貝塚 <sup>66)</sup> (1984)	史跡曾谷貝塚保存管理計画策定委員会(5人) 町田甲一(委員長)、麻生優(副委員長)、岡崎文喜、加藤晋平、寺村光晴	学識経験者:考古学(3)、歴史学(1)、美術史(1)
上高津貝塚 (1986) <sup>67)</sup>	上高津貝塚整備委員会(42人) 青木利次、雨貝文夫、石川徳松、伊藤幸雄、井上辰雄、岩崎宏之、宇田川仁、岡崎健二、州口玉留、菊池保次、日下部晃、黒崎千晴、坂本喜久江、坂本慶司、坂本博、佐野喜一、佐野輝雄、佐野実、佐野好男、澤田浩、鈴木公雄、須田直之、瀧ヶ崎洋之、田崎文雄、鶴町喜美男、中井川功、永井進、中田正剛、永山正、二野屏昌男、羽成力勇、久松俊雄、藤枝正、藤本明人、宮崎貞雄、宮本常之、武藤勤三、村山又右衛門、茂木雅博、矢口寛、湯原竹之助、吉田信義	地元関係者、学識経験者、市助役、収入役、企画部長、都市計画部長、開発部長、建設部長、教育長、教育次長、博物館長、市議会の代表者、市民団体の代表者 その中の学識経験者:歴史学(1)、考古学(1)、歴史地理学(1)、植物学(1)
水子貝塚 <sup>68)</sup> (1990)	水子貝塚専門調査委員会(4人) 麻生優、西田正規、樋口清治、渡辺達三	学識経験者:考古学(2)、保存科学(1)、植物学(1)
黒浜貝塚 <sup>69)</sup> (2006)	国指定史跡黒浜貝塚保存管理計画策定委員会(14人) 小林達雄(委員長)、細田勝(副委員長)、清水康守、黒須喜一、和久井伸一、吉澤宏治、萩原幸子、大塚泰穂、加藤一夫、宮野俊彦、中野政夫、小林弘幸、橋岡和正、小林正	学識経験者(3)、市議会選出委員(2)、地権者(2)、市民公募(2)、市職員(5) その中の学識経験者:考古学(2)、地質学(1)
真福寺貝塚 <sup>70)</sup> (2015) <sup>71)</sup>	国指定史跡真福寺貝塚保存活用計画研究会(7人) 小林達雄(会長)、岡本東三(副会長)、阿部芳郎、久保純子、滝田陽一、塩野博、米林伸	学識経験者:考古学(4)、地理学(1)、都市計画(1)、植物学(1)
中里貝塚 <sup>72)</sup> (2018)	中里貝塚保存活用計画策定委員会(7人) 阿部芳郎(委員長)、石川日出志(副委員長)、吉村晶子、山田和夫、堀江正郎、佐々木富美子、山口宗彦	学識経験者(3)、地元代表者(3)、市民公募(1) その中の学識経験者:考古学(2)、都市計画(1)
山野貝塚 <sup>73)</sup> (2018)	山野貝塚保存活用計画策定委員会(10人) 岡本東三(委員長)、山田常雄(副委員長)、赤坂信、阿部貴弘、加藤文男、菊池博、笹生衛、篠原美智代、中山貴司、百原新	学識経験者(6)、市文化財審議会委員(1)、地元住民代表(2) その中の学識経験者:考古学(3)、造園学(1)、まちづくり(1)、観光(1)活用(1)、植物学(1)
神明貝塚 <sup>74)</sup> (2021) <sup>75)</sup>	国史跡神明貝塚保存活用計画指導者(9人) 阿部芳郎、金子直行、押田佳子、佐々木誠、小林桂子、小笠原永隆、小林学、杉崎茂樹、島村克己	学識経験者(6)、市文化財保護審議会委員(1)、地元代表者(1)、地権者(1) その中の学識経験者:考古学(2)、緑地(1)、建築(1)、ICT(1)、観光(1)
取掛西貝塚 <sup>76)</sup> (2022)	史跡取掛西貝塚保存活用計画策定委員会(5人) 阿部芳郎(委員長)、樋原岳二(副委員長)、堀越正行、谷口康浩、佐々木由香	学識経験者:考古学(5)

詳細に解説できる場合や、十分に発掘されずに凍結保存されている場合が存在する。また、遺跡は人口が密集した大都市に位置しており、外来人口が多く、人口の年齢構造が若年化している状況と、人口の流動が遅い田舎で、高齢化や少子化が顕著な地域社会内の状況もある。さらに、静かな住宅区に位置する遺跡、交通が未発達の地域に位置する遺跡、良好な観光資源と観光基盤施設が整備されている地域に位置する遺跡など、様々な条件と状況が影響を与える。各遺跡は異なる自然や社会的な背景を持っており、その利用状況も一致しないことが多い。観光は史跡活用の注目される方向性の一つであるが、すべての史跡が観光向けの先天的

な条件を持っているわけではない。異なる状況での独自のステークホルダーの条件を分析してから、史跡整備の独自のアプローチを作ることが可能である。

## 5.まとめ

この研究では、関東地方の国指定史跡である貝塚遺跡の整備における貝層表現の同質化現象について、貝塚遺跡の価値解釈、表現方法、そして遺跡整備のステークホルダー分析の3つの観点から考察した。まず初めに、総合解説板の内容分析を通じて、これまでの史跡整備において遺跡の価値解釈が不十分であること

が明らかになった。次に、貝塚遺跡の表現方法とその背後にある理由を追究することで、関東地区の貝塚史跡の整備において、貝塚遺跡の価値認識の欠如が表現方法の選択に影響を与え、遺跡の独自の価値よりも従来の整備手法からの影響が強まっていることが明確になった。また、遺跡整備に関わるステークホルダーの分析を通じて、史跡整備担当者と専門家のパートナーシップに焦点を当て、それが史跡整備の同質化に与える影響を検討した。

本研究では、新たな史跡整備の戦略として、ステークホルダー分析のアプローチを提案している。これにより、既存の専門家パートナーなどだけでなく、異なる自然や社会の背景を持つステークホルダーを特定し、彼らが史跡整備のプロセスにどのように積極的に参加できるかを模索することが可能となる。これを通じて、史跡は地域との連携を一層強化し、観光資源としての価値を最大限に引き出すという目標に向か、史跡整備の同質化の問題に対処する有効な方法となると考えている。

#### 【註】

- 1) 坪井清足 1980 「ソフトな分野のデザイン」『コンセルボ』第2号、p.1
- 2) 文化財保存全国協議会 1990 『遺跡保存の事典』、p.224
- 3) 前川歩 2014 「趣旨」『遺跡学研究』第11号、p.37
- 4) Ertl, John, and Yasuyuki Yoshida 2021: Approaches to experimental pit dwelling reconstruction in the Japanese Central Highlands: Architectural history, community archaeology, and ethnology. EXARC Journal 2021 (4). Persistent Identifier: <http://exarc.net/ark:/88735/10599>
- 5) 田中哲雄・若狭徹・和泉大樹・佐野隆・白石恵介・本中真 2022 「パネルディスカッション」『遺跡学研究』第19号、pp.27-44
- 6) 平野邦雄 2004 「史跡保存の軌跡—その苦闘の記録」吉川弘文館、p.7
- 7) 坪井清足 2014 「戦後埋文保護行政の羅針盤」『遺跡学の宇宙—戦後黎明期を築いた13人の記録』、pp.8-25
- 8) 文化財保存全国協議会1990 『遺跡保存の事典』、p.224
- 9) 文部省 1992 『学制百二十年史』ぎょうせい、p.596
- 10) 文化庁 HP 「平成29年度予算 歴史生き活き！史跡等総合活用整備事業について」[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/yosan/pdf/h29\\_yosan\\_sankol.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/h29_yosan_sankol.pdf).2023-05-20参照
- 11) 稲葉信子 2020 「整備という言葉について、そして文化遺産保存のありようの現在について」『「整備」をどう説明するか（第一部）』、pp.29-40
- 12) 小林達雄 1983 「史跡整備の基本的パターン」『史跡整備の方法—縄文貝塚の整備—』、pp.26-30
- 13) 秋葉光太郎・村田六郎太 1996 「加曾利北貝塚の野外施設について—観察される現状と問題を中心に—」『貝塚博物館紀要』第23号、pp.1-13
- 14) 春日都市教育委員会シンポジウム—神明貝塚—全体討論『国史跡の貝塚の保存と活用の将来像』2022-04-20. [https://www.city.kasukabe.lg.jp/kosodate\\_kyoiku\\_bunka/kyoikuinkai/bunkazai\\_rekishi/9140.html](https://www.city.kasukabe.lg.jp/kosodate_kyoiku_bunka/kyoikuinkai/bunkazai_rekishi/9140.html). 2023-05-20参照
- 15) 前掲註6、p.5
- 16) 戸沢充則 2005 「歴史遺産を未来へ残す—信州・考古学の旅」新泉社、pp.160-162
- 17) The Burra Charter: The Australia ICOMOS Charter for Places of Cultural Significance. 2013.
- 18) 文化庁文化財部記念物課監修 2005 『史跡等整備のてびき：I 総説編・資料編』同成社
- 19) 後藤和民 1981 「集落遺構現地保存の目的と意義」『集落遺構の保存：その実験的研究所説』、pp.12-18
- 20) Grima, Reuben 2017: Presenting Archaeological Sites to the Public. Key Concepts in Public Archaeology, edited by Moshenska, Gabriel, UCL Press, London. pp.73-92.
- 21) Fouseki, K; Taylor, J; Diaz-Andreu, M; van der Linde, S; Pereira-Rodres, A 2018: Locating Heritage Values. In: Hoskins, G and Saville, S, (eds.) Locating Value. Routledge: London, United Kingdom.
- 22) 文化庁文化財部記念物課監修 2005 『史跡等整備のてびき：III 技術編』同成社
- 23) 坪井清足監修 1986 『図説発掘が語る日本史 別巻 整備・復元された遺跡』新人物往来社、pp.42-48
- 24) 前掲註20。
- 25) 文化庁文化財部記念物課監修 2005 『史跡等整備のてびき：II 計画編』同成社
- 26) 千葉市教育委員会 2017 『史跡加曾利貝塚総括報告書』
- 27) 野田市郷土博物館 1985 『史跡山崎貝塚：環境整備報告書』
- 28) 秋山邦雄 2008 「遺跡の活用計画の実際と課題」『季刊考古学』(105)、pp.61-65
- 29) 前掲註25。
- 30) 市川市教育委員会 1986 『史跡曾谷貝塚保存管理計画書』
- 31) 富士見市教育委員会 1994 『史跡水子貝塚環境整備事業報告書』
- 32) 土浦市教育委員会 1996 『国指定史跡上高津貝塚整備事業報告書：上高津貝塚ふるさと歴史の広場』
- 33) 蓼田市教育委員会 2014 『黒浜貝塚：国指定史跡：整備基本構想・基本計画策定報告書』
- 34) 春日都市教育委員会編 2021 『史跡神明貝塚保存活用計画—神明貝塚から春日部の未来と縄文の世界をひらこう—』
- 35) 前掲註25。
- 36) 庄司克 1981 「活用上の問題点」『集落遺構の保存：その実験的研究所説』、pp.109-122
- 37) 前掲註28。
- 38) 前掲註29。
- 39) 前掲註30。
- 40) 前掲註12。
- 41) 前掲註25。

- 42) 前掲註17。
- 43) 前掲註28。
- 44) 前掲註29。
- 45) 前掲註30。
- 46) 前掲註12。
- 47) Freeman R. Edward 1984: *Strategic Management: A Stakeholder Approach*, Cambridge University Press.
- 48) Martha Demas 2004: 'Site unseen': the case for reburial of archaeological sites, *Conservation and Management of Archaeological Sites*, 6: 3–4, pp.137–154, DOI: 10.1179/135050304793137874
- 49) Tomomi Fushiya 2010: *Archaeological Site Management and Local Involvement: A Case Study from Abu Rawash, Egypt*, *Conservation and Management of Archaeological Sites*, 12:4, pp.324–355, DOI: 10.1179/175355213X13789818050224
- 50) Mohammad M. Alazaizeh, Abdelkader Ababneh & Malek M. Jamaliah 2020: Preservation vs. use: understanding tourism stakeholders' value perceptions toward Petra Archaeological Park, *Journal of Tourism and Cultural Change*, 18:3, pp.252–266, DOI: 10.1080/14766825.2019.1628243
- 51) 井上尚明 2011 「史跡整備と考古学II」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第5号、pp.139–148
- 52) 矢野和之 1998 「遺跡整備・保存をめぐるコンサルタントの役割」『緑の読本』第46号 (特集 続・文化財の保存とまちづくり)、pp.348–358
- 53) 鈴木誠 1998 「文化遺産——保存・整備のパートナーシップ」『緑の読本』第46号 (特集 続・文化財の保存とまちづくり)、pp.620–623
- 54) 戸田哲也 2010 「遺跡活用のコラボレーション—官・学・産・民—」『考古学ジャーナル』第607号 (特集 観光考古学I)、pp.13–16
- 55) 井上尚明 2010 「史跡整備と考古学I」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第4号、pp.51–60
- 56) 文化庁文化財第二課 2023 「埋蔵文化財関係統計資料—令和4年度—」
- 57) 前掲註53。
- 58) 安原啓示 1986 「整備・復元された遺跡—総説—」『図説発掘が語る日本史 別巻 整備・復元された遺跡』、p.41
- 59) 前掲註49。
- 60) 千葉市教育委員会・文化課 1983 『史跡整備の方法—縄文貝塚の整備—』
- 61) 前掲註23、p.136
- 62) 後藤和民 1987 「加曾利貝塚の整備計画」『加曾利貝塚博物館20年の歩み』、pp.79–98
- 63) 前掲註25。
- 64) 前掲註28。
- 65) 前掲註30。
- 66) 前掲註29。
- 67) 前掲註31。
- 68) さいたま市教育委員会 2016 『史跡真福寺貝塚保存活用計画』
- 69) 東京都北区教育委員会 2020 『史跡中里貝塚保存活用計画』
- 70) 袖ヶ浦市教育委員会編 2020 『袖ヶ浦市国指定史跡山野貝塚保存活用計画書』
- 71) 前掲註32。
- 72) 船橋市ホームページ. 史跡取掛西貝塚保存活用計画策定委員会、<https://www.city.funabashi.lg.jp/shiesi/jouhoukoukai/004/02/167/index.html>. 2023-05-20参照

**Abstract:** This study examines the homogenization issue in the management of national designated shell mound sites in the Kanto region, focusing on the aspects of value interpretation, archaeological remains presentation, and their stakeholders. It demonstrates how a deficiency in value recognition has influenced the presentation strategies used in site management, resulting in homogenization. Through an analysis of explanatory board contents, the study uncovers inadequacies in how value is perceived in shell mound sites management. The research traces the reasons behind the presentation methods, revealing that the choice of method does not primarily consider the value of the site, arguing that this lack of recognition hinders the evolution and innovation of exhibition means.

Additionally, through an analysis of stakeholders influencing site management outcomes, the study discusses the current state of collaboration between officials and expert partners and its relevance to the issue of homogenization. As a new strategy for site management, this study introduces the concept of stakeholder analysis, aiming to identify stakeholders not only from existing expert partners but also from diverse natural and social contexts. Through exploring how these stakeholders can actively participate in the preservation process, the study strives to enhance the site's collaboration with its local community and optimize its value as a tourism resource. This approach is considered an effective solution to address the homogenization issue in the management of national designated shell mound sites.